外国語活動部会

県研究主題 コミュニケーション能力の素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　栗原　智之（足柄上・足柄下）

〈研究主題〉
外国語活動を通して、互いに表現し合う子の育成
～繰り返しを重視した活動により、児童に自信をつけさせる単元計画～

１　提案内容

（１）　テーマ設定について

上手でなくとも進んで友達とコミュニケーションを図り、自分の思いを伝え、相手の思いを察しながら受け取る子を育てるために、児童が自信をもって取り組むことができるように年間計画及び、活動の流れを作成し実践した。

（２）　外国語活動の取り組み

①年間指導計画の立案と教材開発―　「児童にとっても指導者にとっても無理なく」「話したり聞いたりする活動を中心に」を大切に作成した。いろいろな題材で活用できる教材開発と教材作成を並行して行った。

②基本の流れと繰り返しの重視―　教師の戸惑いや不安を解決するために、下記のような活動の「基本の流れ」を作成した。一つの単元の中で同じ活動を繰り返し行うことで、児童が安心して自信を持ちながら活動を行えると同時に「これなら自分にもできる。」というような指導者にとっての安心にもつながった。

①あいさつ→②歌→③活動１（簡単なゲームや会話）→④活動２（活動①とは違う

（３）　授業実践

①単元計画と教材の工夫―　「児童が自信をもてるように」「繰り返しを重視して」「話す聞く活動の充実」「負担のない教材開発・作成」を重視した。

②授業の改善を図るための評価―　自信をもてずに活動している児童を抽出児とし、抽出児を重点的に見とり評価することで教師自身が授業を振り返ることができた。単元の中で積極的に抽出児とかかわり、見とりと振り返りカードから授業内容を少しずつ変更することで子どものよい変容がみられた。支援する・ほめる・寄り添うことに有効性を感じた。

２　協議内容

（１）　「話す」ことをどのように捉えているか

・積極的にコミュニケーションを図ろうとしているところで十分なのではないか。

（２）　子ども同士のやりとりで英語でなく、日本語でやりとりしてしまう時などの留意点

（３）　歌を多く扱っているが、高学年は歌うことに抵抗はないか？

・ALT が児童の反応のよい曲をよく知っているので紹介してもらっている。

（４）　ふり返りカードの項目の詳細について

・①活動が楽しいか②友だちとかかわることができたか③次の時間にどんなことをしたいかの３点について番号を選択させ、最後に感想を書かせている。

（５）　コミュニケーションの視点について

・小学校段階での「話す」活動はまだ難しく、リスニングの活動を重視することが大切。十分聞いていれば、自然に声に出すようになる。

・リスニングのみの活動には限界がある。ALT の発音をきいて声に出すのが第１歩。

・相手に通じた喜びが自信につながるので、聞くだけでは厳しい。

・聞く活動をメインにおいても子どもは自然に発話する。目立つ子ばかり評価しがちだが、一生懸命聞こうとする子に目を向けたい。それが素地につながる。

３　助言

（１）環境づくり―　子ども達にどんな力をつけさせたいか、学校全体で年間計画を練って、教材開発を行う。

（２）教師同士の環境づくり―　教師間での取り組みに温度差が生じないよう、教師自身の「これならやれるな」という安心・自信につながる単元計画や活動の流れを練り、学校全体で底上げしていくことが大切。

（３）子ども達の環境―　子ども達の実生活が活動の中に反映される必然性のある場面設定をしかけていくと、自然なかたちで自然に発話されるようになる。

提案２　　提案者　　松本　久美子教諭（横浜地区）

＜研究主題＞
指導と評価の一体化を図る教材研究
～横浜版学習指導要領にもとづいた授業実践と評価～

１　提案内容

（１）横浜市での小学校外国語活動のとらえ

小・中９年間で共生の意識や英語によるコミュニケーションの素地・基礎を、「しっかり教え、しっかり引き出す」指導により、緩やかに、着実に育成し、「横浜の子どもの姿」の実現を目指している。

（２）横浜市での小学校外国語活動の実際

平成２１年度よりＹＩＣＡ全校実施、事例集や資料集、評価の手引きを作成

（３）授業実践と成果（○）と課題（△）

①子どもの実態や授業のめあてに合ったゴールの活動を仕組む

・文房具の貸し借りをするゲーム

○自分に必要なものを友達に借りなければならないので、一生懸命伝えようとしたり、貸すほうも、相手が何を必要としているのか一生懸命聞いてあげようとしたりするなど、生きた活動となった。

○言い方がわからない子が自分から友達に言い方を聞いたり、貸すほうが自分の持ち物を貸してあげたり、友達を呼んであげたりするなど子ども同士のよい関わりあいがみられた。

△ 活動の時間の計画が不十分だったため、全員課題をクリアする時間をとってあげることができなかった。

②本時のめあてに沿った活動にする

・タッチングゲーム

○身のまわりにある物の言い方に慣れ親しむことができた。

・ピクチャージェスチャーゲーム

△ちゃんとした絵を描かなければいけないということに意識がいってしまい、英語の発話がほとんどなく、子どもがとまどっていた。

・カードあてゲーム

○わからない友達にジェスチャーでヒントを出すなど、友達と関わりあいながら活動することができた。

・ミッシングゲーム

○ＹＩＣＡ事例集ではグループ活動になっていたが、ペア活動にすることで目を合わせて話すことができ、発話の量も増えた。

☆活動を仕組むことで生き生きとコミュニケーションをとることができる。

☆目の前の子どもを見て育ちが感じられたら、事例集にこだわらずに指導計画をかえる。

２　協議内容

（１）文部科学省の指定しているところを最低限とするならば、それを乗り越えるような授業で、スッキリしていてとてもよい。時間がもっと欲しくなるだろうし、英語好きの子どもが増えるのではないか。

（２）Ｑ：学年があがるにつれての児童の変容について知りたい。

Ａ：赴任して１年目なので変容はわからないが、子どもたちはたどたどしくも話をしている。特別支援級の子も外国語活動は一緒に活動できるのでよい。

（３）Ｑ：１～４年生２０時間分のＹＩＣＡの事例集があるのか。

Ａ：１５時間分の指導案が載っている。１単元は約３～４時間。５時間は国際理解教室を全校で行っている。今後は事例集の見直しも必要とされつつある。

（４）Ｑ：低・中・高のカリキュラムの作り方と、６年生のレベルはどのくらいなのか。

Ａ：６年生で英語がペラペラになるわけではないし、求めてもいない。「外国語活動を通してコミュニケーションがとれること」をねらっている。英語には「恥ずかしさ」をとっぱらってコミュニケーションをとれる良さがある。高学年には「覚えなくていいから言って！」と指導している。

（５）Ｑ：Hi friends!をどのように使っているのか。

Ａ：低学年でも使えるところは使っている。Hi friends!を使った授業のサンプル案を提案している。学校独自のやり方で生かしていってほしい。

３　助言

“Please.”“Thank you.”“Here you are.”の３つの言葉は、感情を込めて使い、デモ化していってほしい。「言う」「話す」の違いにはこだわっていない。繰り返しに耐えうるのは低学年なので、この段階から体全体を使って外国語活動に取り組めるようにしてほしい。「引き出す」のと「教える」のと明確な線引きはできないが、体験して知らず知らずに身につけていけるような指導をしていくべきである。シンプルな単語での返しができるようになることが望ましい。４月から３月までの子どものTotalでのレスポンスを大切にしてほしい。

外国語活動においては、コミュニケーションを図ろうとする子どもの姿を目標をおいていて、何か必要なことをするときにたまたま英語が必要となるようなしかけをつくり、知らず知らずのうちに英語が使える環境や場面作りをしてほしい。また、外国語活動を生かして学

校教育目標を達成していってほしい。

外国語を学ぶことを通して、日本語のよさを改めて振り返ることできる。英語で説明する必要性があって初めて知った日本語もあったりする。正確な英語ではなくても通じることはある。子どもたちと共に楽しんで取り組んでいきましょう。

◎協議の柱に即した協議

児童の実態に沿った単元構想、単元計画の作成について

・単元計画は、繰り返し練習できるように組んだほうがよい。
・行事とあわせたり、学級経営に生かしたりしながら、年間計画は修正していくべきである。
・中学年は、高学年のHi friends!につながるような内容を取り扱うとよいと思う。
・子どもにどんな力をつけさせたいか、しっかり考えて計画する。

言語活動の充実について

・無理のない程度にコミュニケーション能力を求める活動を行う必要がある。
・子どもの生活に身近な材料を選ぶようにしている。
・ゴールを決めてから単元計画をたてることが大切である。
・単元構想を考えるときは。学校が目指す児童像をとらえてから考えるのがベストである。
・高学年には知的欲求をうむものを準備して、必然性を仕組んでいかなくてはならない。

その他

・外国語の授業では、たくさん褒めて自信をつけさせていくべきである。
・外国籍の児童を生かしていくべきである。
・ＡＬＴがいるとメリットはあるが、頼りすぎてしまう。
・中学校の先生と協力してカリキュラムをつくった。研修会をするなど工夫している。
・各小学校で内容が違いすぎると、中学校で混乱してしまう。中学校とのつながりを考える必要がある。
・中学校で男女が関わりながら授業を行うことが難しかったが、近年外国語活動のよい影響なのかよくなってきていると感じる。

◎まとめ（県教育委員会から）

・指導要領の３つの柱を意識してほしい。コミュニケーションの素地をつくるのはこの３つである。ゲームをするときには、３つの柱のどこに関わっているのかを意識してほしい。
・場面設定の工夫をして欲しい。情動をともなった活動をうみだす。意味のない活動は機械的なリピートである。最終的には、児童自らが考えて外国語を使う場面があると、ぐんぐん伸びていく。
・担任は、この子には、こういうところで活躍させようなどと考えて仕組むことができる。スモールステップを積ませて、褒めて自信をつけさせていくことが大切である。絵本活動を積極的にして欲しい。
・あいまいさに耐えることが大切。大量の文に耐えられる素地をつくるのが小学校である。完璧に聞き取るのが大切なのではないと学べるのが小学校の外国語活動である。失敗を温かく受け入れる雰囲気作りに努めてほしい。失敗をしてもやってみようと思える心を育てることが、外国語活動を通してできることではないだろうか。
・４分の１の学校が小中連携を実施していない。情報交換・交流を踏まえ、最終的にはカリキュラムの作成や児童生徒交流を目指して欲しい。